

「憧れの先輩」の役割を持たせ 共に学び、高め合う姿勢を育てる

大阪府 大阪市立淡路中学校

大阪市立淡路中学校では、1年生が校区の小学5年生の体験授業を支援する「リトルティーチャー」を行う。「憧れの先輩」という縦の関係を通して、中学生としての自覚を高めると共に、生徒同士の横のつながりも深めながら、学ぶ意欲を1年生段階から伸ばそうとしている。

●課題

将来への展望を 生徒たちに持たせたい

大阪市立淡路中学校の校区には、地域ぐるみで子どもを育てようという気風が色濃くある。1969年には、同校がいわゆる荒れた状態になったことに対応しようと、地域に「淡中をよくする会」が発足した。町内会や社会福祉協議会などから成るこの組織は、その後、同校と校区の2つの小学校を支える「淡路地域教育協議会」(AWAKYO)に発展し、今もボランティアやイベントなどを活発に続

けている。地域には経済的に厳しい家庭も多く、子育てや家庭学習のさせ方が分からないと相談に来る保護者もいるという。

こうした状況の中、多くの生徒が直面している課題は主に2つある。1つは、基礎学力の不足。もう1つは、将来の展望を描けていない点だ。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の同校の結果を見ても、自分を大事に思う自尊感情が高いにもかかわらず、将来に希望を持つている生徒は少ないという。また、卒業生が高校進学後、約1割が中退してしまふという現状にも危機感を抱いていると、盛岡栄市教頭は話す。

School Data

◎1947(昭和22)年開校。新大阪駅から1.5キロほどの都市部に位置する。教育目標は「表現力豊かな人材の育成」。2012年度は言語活動の充実を研究テーマに掲げている。



校長◎高橋哲也先生

生徒数◎303人 学級数◎12学級(うち特別支援学級3)

所在地◎〒533-0031 大阪府大阪市東淀川区西淡路4-25-53

TEL◎06-6322-4401

URL◎<http://www.ocec.ne.jp/jh/awaji-jh/>

公開研究会◎未定

「どのように生きていけばよいのか、どうすれば社会の役に立てるのか、どんな職業に就きたいのか、展望を持ってない生徒が多く見受けられます。ところが、そういう生徒たちも、小学校の卒業式では『消防士になりたい』『サッカー選手になりたい』といった夢を語っていました。現実を見つめるのは大切なことですが、中学校で生徒の希望をつぶしてしまっている面もあるのではないかと。それは、私たちの課題だと思います。本校は人権教育を長年続けており、『人の心の痛みを分かる人間を育てる』が教育方針の大前提にあります。仲間づくりをした上で、将来を自分

中学1年生の良さを伸ばす

の力で切り開いていける力を身に付けさせたいと考えています」

1年生の段階で重視するのは、人と人がつながるためのコミュニケーション能力の育成だ。人権教育担当の林剛史先生は、次のように説明する。

「将来どのような職業に就いても、人とかわりながら働いていく力は不可欠です。社会に出てから生かせるようなコミュニケーション能力を付けさせたいと考えています」

●活動の工夫①

小学生の中学校体験で1年生をサポート役にする

同校の地域では、以前に高校生が小学生や中学生の学習支援をする活動を行っており、「やる気につながった」「テストの点が上がった」という体験を覚えている保護者がいる。12年前に同校に赴任した林先生は、そうした話を聞き「同じような活動を復活させられないか」と考えていた。2007年度から3年間、文部科学省「人権教育総合推進地域事業」に指定されたことをきっかけに、校区の2つの小学校を交えた具体的な検討に入った。

当時、小学校では「あこがれの継承」という取り組みを行っていた。例えば、遅刻をしがちな小学6年生に運動会の応援団長を任せ、運動会当日まで遅刻をしないようにするなど、自分の生活改善を促し、「ああいう先

輩になろう」と下級生に言われる存在を目指させるものだ。

「中学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんはすごい」と言われるためには、服装や言葉遣いもきちんとしなければなりません。『あこがれの継承』を中学校でも引き継ぎ、1年生を小学生にとつての憧れの存在にしたいと考えました（林先生）

「1年生は、3月31日までは小学校の最上級生として、下級生からいつも頼られる存在でした。ところが、4月1日になった途端に一番下の学年になり、上級生から面倒を見られる立場になります。それは、高校や大学進学時、そして、社会に出る時にも同じように経験することです。ですから、集団の中で一番下の存在となった時、どのように自分の立場を捉え、前向きに自分の生き方を考えていくのか。そうした経験も積ませたいと考えました」（盛岡教頭）

このような課題意識から、4年前に始めたのが「リトルティーチャー」だ。小学5年生を対象にした中学校の体験授業に、中学1年生をサポート役として入る取り組みだ。中学1年生と小学6年生では学力差が小さく、憧れの気持ちが高まらないと考え、あえて小学5年生を対象とした。

取り組みの特徴は、体験授業当日だけでなく、当日に向けて準備を重ねていく数カ月間にわたるプログラムになっていることだ



大阪府立淡路中学校校長
高橋哲也 たかはし・てつや
「生徒一人ひとりの強みを伸ばしていくために、先生方の強みを生かせる職場づくりを大事にしたい」



大阪府立淡路中学校教頭
盛岡栄市 もりおか・えいいち
「人と人との出会い、一期一会を大切にしてほしい。人の心の痛みが分かる人になってほしい」



大阪府立淡路中学校
林剛史 はやし・たけし
人権教育担当。「生徒との人間関係を築いた上で、厳しさの中に優しさのある指導を心掛けたい」

（P.12図1）。学級活動や道徳、「総合的な学習の時間」を利用し、コミュニケーションの仕方を学び、小学生との交流会の内容を考え、当日の運営も行う。

●活動の工夫②

言われてうれしい言葉探しで生徒同士のつながりを豊かに

小学5年生の体験授業は例年2月に行われ、1年生への事前指導は11月に始まる。まずは、上手な話の聴き方など、スムーズなコミュニケーションを図るための技能を学ぶ。この過程で生徒たちの仲間意識も高まっていくと、高橋哲也校長は説明する。

「本校は以前、荒れから立ち直る過程で築いてきた『仲間づくり』を脈々と受け継いで

図1 「リトルティーチャー」の全体計画(2011年度)

全体計画	
夏休み	実施計画の作成(学年集団)
9月	学年集会での動機付け ・AWAKYO カーニバルでの託児所開設に向けて
10月	保育所へのあいさつ訪問 ・交流会、託児所開設に向けた動機付け ・交流会に向けた企画書づくり ①リレーションづくり ②上手な話の聴き方
11月	④保育所交流活動 ⑤サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところを出し合う ・改善するところを出し合う ③おいしい言葉(1) ④上手な質問の仕方 ⑥託児所開設に向けて考える ⑦託児所開設(保育活動) ⑧サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところは?・改善するところは?
12月	⑤おいしい言葉(2) ⑥一方通行のコミュニケーション 学習支援したい教科のアンケート調査
1月	学習支援する教科の発表 ⑦各教科メンバーのリレーションづくり ⑧交流会の内容をプランニングする ⑨小学生との交流会(1) ・担当する学級の児童と交流する ⑩サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところを出し合う ・改善するところを出し合う
2月	⑩小学生との交流会(2) ・担当する学級との昼食交流と交流活動 ⑪サポートを振り返り、練習する ・うまくいったところを出し合う・改善するところを出し合う ⑫学習サポートについて ・白熊の生態 ⑬学習支援内容をプランニングする ⑭学習支援のロールプレイと改善 ⑮小学生への学習支援「リトルティーチャー」 ⑯まとめと今後の自分づくり
3月	教育指導計画の年度末反省で総括

次の4つのマークは、図2のピア・サポートプログラムの概念と一致する
 ①…トレーニング ②…プランニング ③…サポート活動 ④…スーパービジョン
 *同校の資料を基に編集部で作成

図2 ピア・サポートのプログラムから見た各活動の位置付け

トレーニング	プランニング	サポート活動	スーパービジョン
サポート活動に必要なスキルを学ぶため、疑似体験をする	サポート活動を行うための、計画を立てる	実際に対象者を支援する	活動を振り返り、問題点を見付けると共に、次への解決法を考える
1 道徳・学活 ・各教科メンバーのリレーションづくり ・上手な話の聴き方 ・おいしい言葉(1)(2) ・上手な質問の仕方	2 総合・道徳 ・小学生との交流会(1)に向けて	3 総合 ・小学生との交流会(1)	4 総合 ・サポートを振り返り、練習する
5 道徳 ・一方通行のコミュニケーション ・学習サポートについて(白熊の生態)	6 総合 ・小学生との交流会(2)に向けて	7 総合 ・小学生との交流会(2)	8 総合 ・サポートを振り返り、練習する
9 学活・道徳 ・学習支援内容をプランニングする	10 総合 ・小学生への学習支援「リトルティーチャー」	11 総合 ・まとめと今後の自分づくり	

*同校の資料を基に編集部で作成

きています。しかしここ数年、それが希薄と
 なっているのではないかとという危機感があり
 ました。そこで、仲間同士で支え合うピア・
 サポートの概念を再び取り入れ、積極的に生
 徒同士をつないでいこうと考えたのです(図
 2)。信頼している仲間に自分は認められて
 いるという実感を持てれば、授業中でも間違
 いを恐れずに自発的に発言できます。安心し
 て学べる環境をつくるのが、学力向上にも
 つながると考えました」
 コミュニケーション能力を身に付けるため
 の1つが、「おいしい言葉」という授業だ。
 「今の中学生は、『うざい』とか『死ぬ』と
 いった言葉を簡単に口にします。そうした相

手を傷付ける言葉が、コミュニケーションを
 阻害することに気付いていないのです。そこ
 で、言われてうれしい言葉は何かを考える授
 業を設けました」(林先生)
 授業では、「おいしい言葉」というテーマ
 で褒められたと感じる言葉を、まずグルー
 プで挙げ、黒板に書き出し、学級全員が投票す
 る。すると、「ありがとう」の得票が最も多
 いという。
 「大人も普段の生活で『ありがとう』と言
 うのを省略しがちです。相手の言葉に耳を傾
 けた上で『ありがとう』がきちんと言えれば、
 人間関係がより豊かに、つながりがより強く
 なっていくはずですよ」(高橋校長)

授業だけではなく、普段の学校生活でも言
 葉遣いを振り返らせている。
 「これ、何なん?」
 生徒からそう問いつけられた時、林先生は
 あえて答えなかつたり、生徒が言った言葉を
 そのまま繰り返したりする。すると、生徒は
 誤りに気付き、「これは何ですか」と言い直
 すようになるという。
 「その時、私は生徒に『お兄ちゃん、お姉
 ちゃんとして小学校に行くことになるのだか
 ら、そんな言葉遣いをしていたら、中学生な

中学1年生の良さを伸ばす

「そんなもんだと思われてしまうよ」と伝えていきます。リトルティーチャーのような活動をしたからといって、生徒がすぐ変わるわけではありません。言葉遣いがきちんとしていない場面があったら、その都度、教師が声掛けをするようにしています」（林先生）

●活動の工夫③

分らない経験をさせて分らない人の気持ちを感じる

事前指導では、「白熊の生態」というサイコロを使った遊びなどをして、「分らない」「出来ない」という気持ちを押し量る経験もさせた。

この遊びでは、サイコロの目が5の時、真ん中の点が餌で、周りの4つの点が白熊であり、サイコロの目が2の時は餌がなくて白熊が2頭という法則を見つけ出すことが答えとなる。学力に関係なく、隠れた法則を見つけ出せば答えられる問題だ。すると、定期考査では高い点数を取っている生徒でも、答えが分からずにイライラする場合がある。これこそ、教師が意図するところだ。学習の出来る生徒が、この体験を通して、「分らないから、あの子は授業中にイライラしたりしゃべったりするんだ。分らないければ授業は面白くないもんな」と、分らない生徒の気持ちを理解するように促す。これは、年下の小学生に教えるための準備であると同時に、同級生へ

のまなざしを変えていく仕組みにもなっている。

●活動の成果

小学生の「また来てな！」が生徒の学習意欲に結び付く

リトルティーチャーの本番前には、中学1年生が小学校に向き、小学5年生との交流会を2回、開く。リトルティーチャーは国語、社会、数学、理科、英語、体育、美術で行われ、中学1年生も小学5年生もいずれか1教科に参加する。交流会は教科単位で行い、互いを知っておくことをねらいとしている。交流会で行うことも、生徒が考え、会も進行する。「また来てな！」



写真 「リトルティーチャー」当日の様子。中学校を訪れた小学5年生に、中学1年生が丁寧に学習を教える。つまづいた児童がいると、生徒が駆け寄り声を掛ける姿が見られた

「中学校での授業を楽しみにしています」交流会で小学5年生や小学校の先生からそうした言葉を掛けられることが、生徒にとって強い動機付けになっていく。

こうした過程を経て、2月にリトルティーチャーの本番を迎える。本番では、普段の指導に困り、事前の小学生との交流会は抜け出していた生徒が、英語の授業で小学生と一緒に身振り手振りを交えた表現に参加していたり、普段は態度がおうへいな生徒が、小学生に丁寧な根気よく教えたりする姿が見られるという。

他にも、リトルティーチャーは生徒に変化をもたらしている。

「先生、最近、Aが『Do You Have?』何やねん」とか英語について聞いてくる」と、ある生徒が林先生に言ってきた。どうやら、成績の良いその生徒に、Aは授業で分らないことを質問していたようだ。

「それまで学習意欲の低かった生徒が、リトルティーチャーの準備をきつかけに、友だちを頼って復習するようになっていました。小学5年生に教えられるかどうか不安であり、答えられなかったら恥ずかしいという思いがあるのでしよう。リトルティーチャーは、これまで接点の少なかった同級生との横の関係も深めているようです」（林先生）

また、不登校気味で、5、6時間目に行うリトルティーチャーの準備を休みがちだった

Bは、交流会で知り合った2人の小学生から「Bちゃん、Bちゃん」「また来てな」と慕われるようになった。すると、交流会の振り返りシートに「絶対に次も行くから待ってね」と書いていた。

「自分の気持ちをうまく伝えられず、人間関係を築くのがやや苦手でしたが、小学生とのかかわりを通して、自分の居場所を見つけたのでしよう。今までにない自信を持った表情で話をする姿が見られるようになりました。Bは、1年生では早退がとでも多かったのですが、3年生までに格段に減っていきました。異学年の縦のつながりが、自分の姿を変える1つのきっかけになったのかもしれない」(林先生)

また、林先生は、「**Fighting Saturday**」という取り組みでの生徒たちの教え方も年々上手になっていくという。これは、校区の小学5・6年生が同校の部活動に体験入部をするもので、6、12、3月の年3回行っている。希望者のみの参加だが、小学5・6年生の約半数の100人が毎回参加する。

6月の時点では3年生が現役で所属しているため、1年生の出番は少ないが、3年生が引退した12月と3月では、1年生が小学生とかわる場面が増えてくる。顧問は出来るだけ部員に活動内容を考えさせるようにしており、こうした場でも、生徒のコミュニケーション能力が上達しているという。

●今後の課題

1年生で身に付けたスキルを リーダー育成や地域交流につなげる

同校では、1年生での取り組みを踏まえて、2年生、3年生の活動へどのようなにつなげているのか。1つはリーダーの育成だ。

「以前は自然と学級のリーダーが出てくるものでしたが、今は手を掛けないと出てこなくなりしました。グループで遊ぶ機会が減ったのが原因かもしれません。学校が意図的にリーダーを育てていく必要があると考えています」(林先生)

リーダーの資質がある生徒には、リトルティーチャーの活動で司会などを務めるように仕向ける。それが、2年生、3年生になった時、後輩をまとめていく力につながっていくという。

2つめは世代を超えた人間関係の構築だ。1年生でリトルティーチャーを通して小学生や同級生とのつながりを深め、2年生では地域の人々との接点を重視する。例えば、「AWAKYOカーニバル」というAWAKYO主催のイベントで模擬店を出店する。そこでは、事前に商店街に立ってマーケティングのためのアンケートを実施したり、商品を仕入れる業者に出向いて商品の扱い方の指導を受けたりしながら、地域の人たちに鍛えてもらっている。3年生では2泊の民泊体験で農

家と交流する。更に、コミュニケーションの幅を外へと広げていくためだ。

12年度は「ようこそ先輩」と題し、高校2年生になった卒業生を中学校に招待し、中学2年生に高校での体験を話してもらった。

「大人になって子育ての悩みが出てきた時などに、地域の先輩に聞けるというような関係を築いてほしいと考えています。もっと大きく言えば、リトルティーチャーを地域の再生にもつなげていけるような活動に出来るよう頑張っていきたいと思います」(林先生)

高橋校長が考える1年生に大切な指導

生徒を取り巻く環境が変われば、生徒の育ちも変わります。大事なことは、これまでの経験と共に、目の前の生徒を取り巻く環境や背景を踏まえながら、教師全員で丁寧に指導に当たることです。

そうした中で先生方に強調しているのは、忙しい日常にあっても教科指導力を高めることです。私も、出来る限り若手の先生方と教科指導について意見交換できる時間を持つようにしています。月並みで地道ではありますが、「わかる授業」づくりが生徒の安心と落ち着きにつながると考えています。